実践事例報告

第2子を持つ親と子どものための子育て支援プログラム

Iwatan子育て愛ねっとアカデミー　富田雅子

本発表の流れ

１．プログラム構築

２．プログラム参加親子の葛藤場面に着目

2-1 研究の背景と目的

2-2 研究方法

2-3 事例分析

2-4 まとめ

第2子を持つ親と子どものための子育て支援プログラムについて（１）

プログラムの構築

プログラム構築の経緯

- 東広島市**子ども未来部子ども家庭課**
- **広島大学大学院の研究チーム**

  幼児教育学専攻の大学院生5名　津川典子・本岡美保子・周心慧・森依子・富田雅子と七木田敦教授（通称：Team Nanakida)
- 東広島市で**BP（赤ちゃんがきた）プログラムに関わっているファシリテーター**
- 東広島市**地域子育て支援センター担当者**

支援者会議でのグループワーク

ワーキングの内容

1グループ4～5名

6グループ　31名

１、子育て支援の経験の中で<u>きょうだい</u>に関する子育ての相談項目を出す。

２、相談項目についての対応を出す。

ワーキングで集まったもの

２２３個の項目

カテゴリー分け

大項目（１１）

小項目（２５）

東広島市でBPプログラムに関わっている方と地域子育て支援センター担当者へのアンケートから

「第2子親子プログラム」で取り上げるべきもの(上位3位まで)

- きょうだいの育ち　２４
- 社会資源　４
- タッチケア　３
- 関わり遊び　１

- 母親のストレス軽減　２４
- 発達の理解　１４
- 大人の生活と子どもの育ち　１０
- 絵本　２

⇒対子ども支援（きょうだいの育ち、発達の理解、関りあそび）

⇒対大人支援　（母親のストレス軽減、大人の生活と子どもの育ち、社会資源）

対応策

多くなされていたもの

- きょうだいのこと（46）

あまりなされていなかったもの

- 母親自身のストレス（14)
- 子育て方法（６）
- 夫の子育て参加（６）
- 経済（２）
- 生活リズム（４）
- 嬉しいこと（１）
- 社会資源（１）

第2子のプログラムを作る意義

新たな家族成員を迎え入れる体験は、家族が発達を遂げるライフイベント（礒山2014）

支援者は
「家族」が育つチャンス
を支えることができる

第2子のプログラムを作る意義

子育て支援に関わる人が・・・

1　今まで経験したことの知識の整理と共有

2　色々と調べることで知識が増える

3　社会資源に出会うネットワークの拡大

東広島市「第２子親子プログラム」の特徴

１「保育の専門性」を活かしたプログラム

２「親も子（特に第１子）も成長」できるプログラム

３　事例に合わせて臨機応変にできるプログラム

４　実施しながらプログラムの内容検討が可能

プログラムの流れと4つの柱

アプローチタイム 受け入れ　絵本の読み聞かせ　自由遊び おやつ

コアタイム　自己紹介　「大変なこと・手を借りたいこと」

語り合い　テーマを設定「〇〇な時どうしてる？」

フリータイム　語らい　自由遊び

フィードバックタイム（保護者） アンケート記入　自由に解散

（支援者） プログラム後に振り返り

プログラム構築の要点

☛専門職が関わる

◎テーマのあるプログラムとしての意義

☛第1子と共に親子3人で参加

◎葛藤が生じやすいが受け入れ

☛4つの柱・時間的枠組み

◎アプローチタイム・フリータイムの重要性

第2子を持つ親と子どものための子育て支援プログラムについて（２）

―参加親子の葛藤場面に着目して―

研究の背景

子育ての社会化　（2,000年：新エンゼルプラン以降）

家庭　⇔　社会

・**子育ての社会化**とは・・・あらゆる親の子育て、生活課題の解決のために社会資源が活用できる状態とし、「親」を地域で共に子育てする担い手として位置づけること（井上ら2008）

・**子育ての 公共化**（施設の設置・運営、専門職の配置）

共同化（住民が親の子育て観を理解し協働する）

を進めることが重要（井上ら2008）

先行研究（１）社会との繋がり

・子育て支援センター（井上ら2008）

「子育ての社会化」への寄与が期待

・子育て広場デビューのプロセス（佐藤2013）

戸惑い・不安・困難

・ママ友作り（宮木2004）

1人目の時よりも2人目の時の対人関係が重要

・子育てサークル（原田2006）

ピアサポートは期待されるが心理的な問題解決には限界

☛子育て支援センターでの可能性は示唆されるも、2人目の母親への対人関係援助の必要性や専門職によるプログラム実施の必要性については研究が成されていない。

先行研究（２）2人同時の子育て葛藤

・第2子妊娠中の母親への調査（磯山2010）

→2人同時の子育てのイメージがつかない・不安

第1子への関わり方に戸惑い

・第2子誕生後の母親語り（熊井2007）

第1子と第2子への関わりに偏り　→　葛藤

・第2子妊娠中から出産後1歳半までにおける母親の第1子に対する認知と対応（穴吹ら2017）

→第2子への同胞葛藤が理解できていない

☛社会との関わりの中での2人同時の子育て葛藤の研究はない

先行研究（３）関係性

・支援者による利用者との関係性の構築（2010三井）

→支援者が親同士の関係性の構築を働きかけることで、利用者同士の支え合いが生じる

・育児支援プログラムの開発（2007前原ら）

→母子への家族と社会の関係性への看護介入は、母親同士のピアサポートを形成する

☛第1子・第2子を含めた親子3人と他者（社会）との関係性の構築（ピアサポート）を視野に入れた研究はない。

先行研究の課題

☛子育て支援センターでの可能性は示唆されるも、第2子を持つ母親への対人関係援助の必要性や専門職によるプログラム実施の必要性については研究が成されていない。

☛社会との関わりの中での2人同時の子育て葛藤の研究はない

☛第1子・第2子を含めた親子3人と他者（社会）との関係性の構築（ピアサポート）を視野に入れた研究はない。

研究目的

１．プログラムに参加することで起こる親子の葛藤場面に着目し、葛藤の意味を明らかにする。

２．今後のプログラム実施への示唆

本研究における葛藤の定義

「プログラムに参加することにより、2つ以上の欲求が発生し、それを同時に満たすことができない状態」

研究対象

- 家庭で2人の子どもを養育している親子
- K子育て支援センターにて実施（1組がF支援センターより参加）
- 6組の親子が参加申込（1組は2回共に欠席）
- 第1子は2歳以下（男児3名・女児2名）

	仮名	第1子年齢	性別	第2子年齢	性別	
1	Mさん	1歳11ヵ月	男	3ヶ月	女	
2	Nさん	2歳 9ヶ月	男	4ヶ月	女	1，2回目欠席
3	Oさん	2歳 8ヶ月	男	5ヶ月	男	
4	Pさん	2歳 6ヶ月	女	5ヶ月	女	
5	Qさん	2歳 6ヶ月	男	2ヵ月	男	2回目欠席
6	Rさん	1歳 6ヶ月	女	6ヶ月	男	

研究方法

◆観察

カメラを用いながら、メモを取る

◆参加者へのアンケート

実践の終了前、参加者に感想　を記入してもらう

◆支援者へのインタビューとアンケート

実践が終了後、支援者の振り返りを聞く、
アンケートへの記入

「にこプロ」の実施スケジュール

実践	時期	場所	対象組	第１子年齢	第２子年齢
①	2017年11月16日 10:20～13:00	K支援センター	5組	3歳未満 （未就園児）	6ヶ月未満
②	2017年11月21日 10:20～13:00	K支援センター	4組	3歳未満 （未就園児）	6ヶ月未満
③	2018年1月18日 10：00～13：00	S支援センター	5組	2～4歳 （未就園児）	0～1歳
④	2018年1月25日 10：00～13：00	S支援センター	5組	2～4歳 （未就園児）	0～1歳
⑤	2018年2月1日 10：00～13：30	S支援センター	6組	3～6歳 （在園児・通園中）	1～3歳

Ｋ子育て支援センターでの実践

参加対象：
第２子を６ヶ月未満の赤ちゃんに限定

１回目のテーマ：上の子の変化
２回目のテーマ：親の変化

第２子を迎えた間も無くのお母さんだからこそ、
共通に悩むテーマだった

K支援センターの実践に着目する理由

- Kセンターのプログラム参加者

  ①第2子が生れたばかり　（6ヶ月未満）

  ②第1子と第2子の年齢があまり離れていない（年齢が近い）

  ③F支援センターとの協同によるプログラムである

2人同時の子育て葛藤が起りやすい・・・

- Sセンターのプログラム参加者

  自園に併設する支援センターでの開催　⇒

  支援センターや園、スタッフになじみがあり既に仲間意識がある

  同じ子ども園に入園予定

分析　支援者の振り返り

- 支援者アンケートと語りから
- 2人同時の子育てのリアルがあった
- 葛藤・・泣いた・・泣けた・・受け入れた
  （ネガテイブ　→　ポジティイブ　ピアサポート）
- 葛藤する親子に他の参加者が動じない（第2子だから）
- 支援者の専門性と連携が不可欠（複数の支援者の必要性）
- フリータイムの雰囲気が良かった（〇親子が談笑）

事例：〇男（第1子）の葛藤

- 背景
- 〇君は、5ヶ月になる弟（男児）がいる
- K支援センターに来るのは初めて
- 保育園の先生に「お兄ちゃんになるんだね」と言われることを嫌う
- 第2子が産院から退院する時、「なんで連れて帰るん」といった

○男のエピソード

- プログラム1回目
- ○男はお母さんにぴったりくっつく感じで少し不安そうに入室
- ほどなくプログラムが開始
- ○男はおもちゃのある方を指さし、母親と一緒に移動したい様子
- 母親はプログラムに参加したいと思いがある
- 泣いている○男と共にプログラムに参加する
- ○男は、自分の事が話題になると泣き止む
- 母親がプログラムに参加しようとすると泣きを繰り返す

事例１の考察

- ○男は、初めての場所に不安
- おもちゃで遊びたい、母親と一緒にいたいだけではない
- 母親がプログラムに参加しようとすると泣くことから、母親が社会化することへの葛藤

母親の葛藤

- 背景
- プログラム2回目も時間通り2人を連れてくる
- 〇男は母親の傍から離れず泣くので、プログラムの集まりの場所を〇男のいる場所へ移動
- 他の参加者の第一子は、機嫌よく遊んでいる
- 〇男の弟が授乳時間になると〇男が泣く。

母親の葛藤場面

母親の葛藤エピソード

- プログラム2回目
- この日も朝から〇男は母親から離れず泣いている・集まりの雰囲気を嫌う
- プログラムを〇男親子の居る場所へ移動して行う
- 第2子が泣きだすのでミルクを与えながら〇男をあやす
- 〇男の泣きがひどくなる
- 母親は支援者からの声掛けに泣き崩れ、〇男を抱っこして泣きながら部屋を出る
- 暫くして母親と共に〇男も入室し、機嫌よく遊び始める
- 〇男も母親も参加者と共に笑顔で歓談

母親の葛藤

- 考察
- 2人の子どもからの同時要求
- プログラム参加への葛藤
- 泣き止まない〇男のプログラムへの影響を危惧
- 他の参加者との比較

参加者の振り返り

- 参加者アンケート
- 上の子も遊びながら参加できてよかった
- 通り過ぎていくんだろうな、と思えて安心した
- 自分も頑張ろうと思えた
- 同じメンバーで話しやすかった
- もっと話す時間が欲しかった
- 子どもが場に慣れるに時間がかかった
- 絵本が心にしみた

まとめ　葛藤の意味

- 2人の子どもがいたから起きた葛藤であった
- 母親も子どもも葛藤したことにより感情を表出できた
- ほかのお母さんが〇男の母を受け入れたのは、自分の今までの経験を含めて受容できたのではないか
- 同じ第２子を持っている親だからこそのピアサポート
- 葛藤することはネガテイブなことではい
- 親子が社会化する中での葛藤　→　親子の成長
- 今後の課題　　プログラムの拡散と継続した葛藤場面収集と分析

引用文献

- 吹絵美・川崎佳代子・曽我部恵美子・子安恵子（2017）「第2子妊娠から出産後1歳半までにおける母親の第1子に対する認知と対応ー地方都市Y市に在住する母親へのインタビュー調査—『関西看護医療大学紀要』第9巻（1）10ー24
- 原田正文（2006）「子育ての変貌と次世代育成支援ー兵庫レポートによる子育て環境と子ども虐待予防ー」『名古屋大学出版会』
- 井上大樹・河野和枝・沢村紀子・前田典子・山下由紀夫・吉岡亜希子（2008）「子育て支援センターの機能と地域子育て協同への可能性」『北海道大学大学院教育学研究院』
- 磯山あけみ（2016）第2子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムの開発と評価. 日本助産学会誌30(1), 68-77.
- 國吉和子（2011）「臨床心理士がおこなう親への支援ー子どもの感情の社会化と親の関わり」『神戸女学院大学論集』
- 佐藤美奈子（2013）「初産婦の産後から子育て広場デビューまでのプロセスー子育て広場に参加している母親の語りの分析からー」『帝京平成大学紀要』第24巻第2号375ー384

参考文献

- 津川典子・富田雅子・本岡美保子・周心慧・森依子（2018）「第2子を持つ親子のための子育て支援プログラムの構築－東広島市子育て支援センターとの協同から－」『広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設』発行『幼年教育研究年報』第40巻．ｐ.83－91
- 周心慧・津川典子・富田雅子・本岡美保子・森依子（2018）「第2子を持つ親と子どものための子育て支援プログラムについて（１）－参加者のニーズと支援内容－」日本乳幼児教育学会発表論文集（CD-ROM版）ｐ.118－119
- 富田雅子・津川典子・本岡美保子・周心慧・森依子（2018）「第2子を持つ親と子どものための子育て支援プログラムについて（２）－参加親子の葛藤に着目して－」日本乳幼児教育学会発表論文集（CD-ROM版）ｐ.120－121

※本発表は、日本乳幼児教育学会において発表した「第2子を持つ親と子どもの為の子育て支援プログラムについて」１）と「第2子を持つ親と子どもの為の子育て支援プログラムについて」（２）を併せて発表するものとする。

ありがとうございました